

## 正岡子規と中村不折の写生論の研究（1）

柴田奈美

### 1. はじめに

子規の写生論は、フォンタネージを起源とし、浅井忠や中村不折に受け継がれたものが、忠実に受け継がれてきているとされてきた<sup>1)</sup>。しかし、不折の論を読み直し、子規の論の変化を年代順に確かめたところ、次のような結論を得て、「写生論の再検討—子規と不折の場合<sup>2)</sup>—」「子規の写生論の変容<sup>3)</sup>」に発表した。

- ① 付け加えることを禁止したフォンタネージや浅井忠に対し、不折は「絵画」に仕上げるための付け足しを積極的に肯定した。この不折の写生論が子規に伝えられたこと。
- ② 子規の俳句理論は、初期の頃は、写実と空想を等価に考える不折の論をそのまま受け入れたが、明治30年から同31年を境に写実重視の方向に偏っていったこと。それはフォンタネージを起源とする写生論をそのまま吸収したと言うよりも、新派としての自派の特色を明らかにするために、近年台頭してきた紫派の小作品に重ね合わせた上で創り上げた子規独自の写生論であったこと。
- ③ 子規は明治32年の段階において、印象明瞭・淡泊という新趣味を絵画・小説・俳句界全体の潮流として捉え、大勢の進化に伴うものであるという見解を述べるに至り、絵画においては紫派に自派の作品を重ね合わせていること。
- ④ フォンタネージの教えの一つであり、浅井忠・不折の画論に継承されてきた「主となる物を精密に描き、他の物を軽く描く」という写生論を踏まえた上で、「新派は中心が一点に集中せず稍放散する傾向にある」と変容させていること。

以上のような結論を得、子規や不折の俳論と画論をさらに丁寧に読み直す必要を感じた。子規や不折の論文を小間切れに引用するのではなく、「研究資料」として節単位で引用した上でコメントを加えて、今後の論文執筆のための資料としたい。

本稿は既に発表した上記の論文に、部分的に引用した不折の『画道一斑』の「天然と人工<sup>4)</sup>」の全文を取り上げる。

### 2. 『画道一斑』の「天然と人工」

画題は天然から採る、天然位豊富な画題を持って居るものはあるまい、幾萬採っても幾億採っても更に尽くる所がない、而して又天然の画題ほどよいものはないであらふ。天然から画題を採ることは、近頃になつて益々歓迎されて来た。一寸した小品

ものを作るにしても、終日座敷に兀坐して、考へても考へても碌なものが出て来ない時に、家を飛出して五六丁もあるく中には、五枚や六枚は容易く発見される。然し此天然も教育の無い者から見れば、一向に価値がない。それ等の人の目は恰も節穴同然で、何程よい天然に遭遇しても、少しも画題にはなら（欠字）いのである。頼山陽は耶馬溪を天下に紹介して、海内無双の景色だと唱た。それで今の画家連中はわざわざ見に行くが、失望して帰つて来ては、山陽の文章の妙には敬服するが、耶馬溪には更に感服しないと言ふ。小生は未だ耶馬溪を見ぬから、如何いふ所であるか知らんが、恐らくは舞文の妙もあらふが、山陽の詩眼から観察した耶馬溪は、詩眼のない常人には山陽と同様に見ることが出来ないのであらふと思ふ。蕪邨は其文学的練磨と相並行して、古人未発の画境を発見して居るではないか。同一天然も其人の力量次第で、瓦にも見え又金剛石にも見える。近頃一派の先生達が連りに学問の不必用を唱へて、美術は学問から得られるものではない、美術は手臂の運用がものをいふのである、文字上や理屈上の詮索ではない、目に一丁字なくても関はぬ、神品傑作は書籍の上から得られるものでないと言ふ。此様な説が存外有力なのであるが、さてそれ等の人々の描いたものは如何かといふに、浅薄なる天然、悪く言ふと下手な写真の様なものが出来るのだ、それでも本人は大得意で、此無意味な所が天然の天然たる所以で、此間消息を解し得る者は実に我党の数人あるのみなど、気鬱を吐いて居る。此間も或一人が動物室といふ画を描いて来た、それは博物館の一部で、硝子函の中の動物と、観覧の客といふ工合に、唯見た通りの有りのまを描いたものであつた。小生はこれでは画といふ資格がないではないか、何とか画の資格を拵らへなくてはならん、一人が他の一人に向て動物の説明をして居る所でもよい、子供が背伸びをして覗き込んで居る所でもよからふ、説明書と引合せて考へて居る所も面白からふといふ調子で話したら、先生大に不承知で、僕は徹頭徹尾天然を画くのである、そんな人工は加へないと主張した、小生も又自己の意見を弁明して、小生の今言ふたことは少しも人工ではない、博物館で発見した天然の一部分の中に就て、美的で画題に相当したものを見立てたのである、君のは天然の尽ではあらふが、画題にはなつて居らぬではないかと言ふた。

無学者の見た自然は、無意味で平板に失して居る、天然をして画たらしめんと欲するには、平素の修養が肝腎だ。本を読むよし、腕を練るのもよい、智識と技巧とは並行させたいものである、技巧ばかりでは画は成らず、本を読むばかりでは

\*SHIBATA Nami 造形デザイン学科

尚更のこと、<sup>たゞ</sup>菅に本を読むばかりならば寧ろ技巧ばかりの方を取る。古来名人大家と言はれた人々は、必ず他の學術の修養も相当にある、レオナルド・ダ・ビンチは諸般の學術技芸に精通した人だ、ミケランゼロも詩人小説家建築家として秀で居つた、近くはピュビス・ド・シヤヴァンスも仏国近世の大家で、如何して今の世にあの様な人物が仏国あたりへ生まれたらふと疑はれて居つた程画想に富んだ人であつたが、此人も矢張立派な哲学者であつたと云ふ、小生の恩師ローランス先生も、又美学者として有名である、日本でも雪舟は禅学の方で、四明天王第一座といふ地位に上つた位だ、支那時代の画伯兼書道の名人たる董其昌は、萬里の路を行かず、萬卷の書を読ず、画祖たらんと欲するもそれ得べけんやと言つて居る。學問は画の害を為さざるのみか、却て大家を養成するには是非共必用の道具であるといふことは、以上陳べ來つた事實で大抵は見當がつくだらうと思ふ。只學問の方法は訓誥的考証的に流れぬやうにしなければならぬ、さもないと技術に利益のない許りでなく、却て画道の障害物となつて學問せぬ方が余程よいことになる、であるから余り文字章句などに拘泥せずして、己に利益ある美術の要素泉源のある所を探つて居ればそれでよいと思ふ、これが最も有利なる画家の讀書法ではあるまいか。

以上は天然の価値及選択に就て陳べたのであるが、此他に人工といふものがある、或る西洋の論者には、人工は絶対的無価値の者だといふて居る者がある、此の種の人はアレキサンドル帝がコンスタンチノープルを攻撃する図を想像で描いたシャルス・ルブランの仕事よりは、土器に鶏卵を三つ描いたシャルダンの仕事の方が余程よいといふて居る。シャルス・ルブランのものは幅五間ばかりの大作で、一図に人が二百人程も居るが、シャルダンののは僅に一尺有余の小幅である。余りに天然を過重する結果は此やうな奇言を吐く様になるのだ。日本にも近頃此流を汲む先生達が十分有る様子だが、これは丁度天然過重宗とでも名付く可き教門の信者となつて、非理想如来といふ様なものに帰依し、それを迷信するのと同じである。近来欧州に理想派が非常な勢力で勃興して來たのは、つまりこんな極端な自然派に対抗する為だと見ても差支はあるまい。

理想もシヤヴァンスやベツクリンやバーン・ジョンスの仕事を見れば、実に尊いものだ。自然もいいが、人工もこゝ迄到達すれば自然以上である、決して或る一派で排斥するやうなつまらぬものではない。今日の如く天然派の盛なる欧州に於て、不思議なことには却て其反対の理想派が上の方の地位を占て居る形跡が見える。試に近代の名家を挙げれば、仏国ではシヤヴァンス、ローランス、独逸ではクリンゲール、ベツクリン、英国ではワッツ、バーン・ジョンスなどで、孰れも其国人の誇て語る所である。

歴史画家にて、古代の歴史を描くものを罵倒する一派がある、

其攻撃の言葉に依れば、何程骨を折ても其當時に於ける画工の仕事の真正なるに如かずといふに歸する。これも一理あるが、美術家がアレキサンドル大帝の風采を想望して画にしたとて、悪い事ではないと思ふ、必ずしも大帝と同時代の人の手になつたものでなければならぬといふ法はあるまい。少しの相違をも許さぬ歴史参考図ならば兎に角、美術としての価値は、当代の人になつたとしても別に變りはあるまい。さて前条の理想人工といふもの、原流を尋ねて見るに、名を変へて理想人工といふが、小生は矢張天然と同一のものであると思ふ、理想家が色々の天然で実験した事を綜合して、理想画を作るので、それ以外に恐らくは人工も理想もないのである。大なる理想家とは、即ち尤も多くの天然趣味を解し得る人なのだ。鰐の口、鱗の角、鷲の爪、虎の眼といふやうな天然物の結合で、龍が出来上るではないか、故に最巧妙の理想は、萬卷の書を読み、萬里の路を行つた結果である。天然趣味の上等な者が結合して理想となるとすれば、平板な天然よりも、却て理想の方に高等なもの出来るのは無理のない事と思ふ。

余は平静なる天然を愛する一人であるが、之れと同時にひねくれた天然即ち理想も随分面白いと思ふ、孰れをそれと指して軽重することは出来ない。画家は自身の適不適を考へ、適する方面を選ぶで、平静な方へでも、ひねくれた方へでも、勝手に行くがよい、宗教的盲從的の氣兼はいらぬ心配であると思ふ。

### 3. 解説

『画道一斑』の「天然と人工」の中で、不折が主張しているのは次の3点である。

①画題は天然から採ること。天然は豊富な画題を持っていること。

ここで言う「天然」とは、「考へても考へても碌なものが出て來ない」とあることから、「頭の中で考へたこと」に対するもので、「自然」に限らず広く「眼前に見える事實」と解釈できる。「画題を天然から採ること」とはすなわち「写生」である。

この考え方はフォンタネージの教えによるもので、不折の著した『俳画法』（光華堂 明治42年6月）の中にも、小川正太郎や浅井忠から聞いたフォンタネージの指導の思ひ出話として、絵になるところが無いと不平を言つたところ、フォンタネージは「君等が悪いので場所の悪いのではないよ、活眼を以て写生したならば君等位の人數では一代や二代ではかき尽すことが出来ぬだらうといふた」（31頁）と記している。

②天然を見る目を養うために、學問が必要であること。芸術としての価値ある画にするために、画家の頭のはたらき

\*正岡子規と中村不折の写生論の研究（1） 柴田奈美

必要なこと。

学問の裏打ちのない場合、「浅薄なる天然、悪く言ふと下手な写真の様な」作品ができ上がると述べ、画家の頭の働きの大切さを主張。ここで例を挙げているのが「動物室」の絵である。不折はこれを「唯見た通りの有りのまを描いたもの」とし、「画といふ資格がない」と批判。「画の資格を拵へ」るために、「一人が他の一人に向て動物の説明をして居る所でもよい、子供が背伸びをして除き覗き込んで居る所でもよかるふ、説明書と引合せて考へて居る所も面白かるふ」と、そこには実在しないが画として面白くなるようなモノ（美的で画題に相当するもの）を描き足すことを主張したのである。

この、「画の資格を拵えるためには、その場に無いものを付け加えても構わない」という考え方が、フォンタネージや浅井忠の教えとは異なる点である。フォンタネージと浅井忠は「真意を描き出すために取捨選択や画面構成などを行う点、主となる物に焦点を合わせて特に精密に描き、他の物を軽く描く点において、画家の考えをつけ加えなくてはならないが、その場には無い物をつけ加えてはならない」と教えていたのである。

### ③絵を描く際に理想と天然はどちらも大切であること。

ここで言う「理想」は「人工」とも表現され、「想像」と解釈できる。事実の描写を重視するあまり、想像で描かれた大作よりも事実のみを描いた小幅の作品を評価する者を批判している。

「理想の源流を尋ねれば、天然と同一のものとする。さまざまな天然で実験した事を総合して理想画を作るためである。平板な天然も、ひねくれた天然（言い換えれば理想）も軽重することはできない。画家の適性に従って進めばよい」と述べている点には、不折のバランスの取れた考え方が指摘できる。どちらか一方の考え方に固執することなく、天然も理想（人工）もどちらも尊いと述べているのである。

以上、3点の主張を指摘したが、これらの主張は明治30年までの子規の主張に重なっている。

まず、①の「画題は天然から取ること。天然は豊富な画題を持っている」について。

明治27年春に中村不折と出会った子規は、写生を教えられて句作に応用した。その当時の思い出を「獺祭書屋俳句帖抄上巻を出版するに就きて思ひつきたる所をいふ」（『ホトギス』明治35年2月『子規全集 第五巻』468）の中で、次のように回想している。

「小日本は其年の七月に倒れて仕舞つたので俳句は再び日本に掲載することになった。それで自分は余程ひまになつたので秋の終りから冬の初めにかけて毎日の様

に根岸の郊外を散歩した。其時は何時でも一冊の手帳と一本の鉛筆とを携へて得るに随て俳句を書きつけた。写生的の妙味は此時に始めてわかつた様な心持がして毎日得る所の十句二十句位な獲物は平凡な句が多いけれども何となく厭味がなくて垢抜がした様に思ふて自分ながら嬉しかつた」。

写生の面白さに気づいた子規は、弟子たちにも写生による句作を推奨した。河東碧梧桐は「獺祭書屋俳句帖抄上巻」（『ホトギス』明治35年6月『子規全集 第三巻』683頁）の中で次のように回想している。

「○根岸郊外の散歩に就ては、予も屢々お供をして往つた事を覚えて居る」。「或日も（慥か冬の初であつたらう）根岸庵を出てから、音無川に沿ふて郊外に出で、三河島辺をぶらついて、兎に角二十句以上作らうといふ約束をして帰つて来た。すると予は僅かに十句許りしか出来なかつたにも関わらず、子規君は三十句許り出来て居つた。『何でも材料になるぢやないか』と叱られたが其通り、音無川のある処に一本の無花果がスーと立つて居て、もう葉も何もなかつたが、予も之には一寸目はつけたが、これが句になるものかと捨て居つたのに、子規君の三十句のうち、この無花果が誦込んであつたので、ハア写生といふのはかういふ風にやるのだなど、其時始めて悟つたやうに思つたこともあつた」。

どのような場所でも何でも材料になるという、フォンタネージから浅井忠を経て不折に伝えられた教えと、子規が碧梧桐に与えた注意とが一致していることが指摘できる。

また、明治30年に発表された「俳諧復古籠」では、子規は次のように写生の大切さを述べている。（『ほととぎす』明治30・2『子規全集 第四巻』582頁）。

「毎日見馴れたる十歩の小庭にでも探せば詩趣は出て来るなり、きのふ探し尽したる後にも猶探し居れば今日も亦新しき詩趣を得ん、況して四時朝夕日夜、時の変る毎に詩趣常に新なるへし、試みに門前を出てよ、試みに郊外に出てよ、何物か詩趣ならざらん、何事か材料ならざらん、されど小庭門前郊外のみ安んずるは宜しからず、若し出来得へくんは高山大海にも遊へ、名所旧蹟にも遊へ、詩料いよいよ多く詩想ますます高からん」

次に、②「天然を見る目を養うために、学問が必要である」また「画としての資格を拵えるために、その場には無いものをつけ加えて良い」について。

明治28年に発表した「俳諧大要」の「修学第三期」には、さまざまな古今の俳書を読むべきことから始まり、さらに歴史・地理、俳句以外の文学・美術、そして天下萬般の学問に通じなければならないと、学問の必要性を次のように述べている。

「一読を値する俳書は得るに随つて一読すべし（中略）」「俳

書を読むを以て満足せば古人の糟粕を嘗むるに過ぎざるべし古句以外に新材料を探討せざるべからず新材料を得べき歴史地理書等之を読むべし（中略）「俳句以外の文学にも大体通曉せざるべからず（中略）」「文学に通曉し美術に通曉す未だ以て足れりとすべからず天下萬般の学に通じ事に曉らざるべからず然れども一生の間に自ら実験し得べき事物は極めて少数なり故に多く学び博く識らんと欲せば書籍によるを最良しとす」（「日本」明治28年12月23日『子規全集 第四卷』405頁～406頁）

また、明治30年に発表した「俳諧復古籠」（「ほととぎす」明治30・2『子規全集 第四卷』577頁～578頁）には次のようにある。

「時によりては少しづつ实景実物の位置を变じ或は主観的に外物を取り来りて实景を修飾することさへあり、こは实景は天然の美人の如き者なれば猶多少の欠点を免れず、故に眉を直し高眉を書き紅粉白粉を着け綾羅錦繡を着せて完全の美人たらしむるなり、此の如く選択し修飾して得たる俳句は俳句中の上乗なる者なり」

後に写生重視の方向に傾いた発言をする子規であるが、この明治30年頃までは、このように不折の主張に沿った発言をしていたのである。

③「理想と天然どちらも大切である」については、例えば「俳人蕪村」（「日本附録週報」明治30年8月30日『子規全集 第四卷』640頁）では次のように述べている。

「文学の実験に依らざるべからざるは猶絵画の写生に依らざるべからざるが如し。然とも絵画の写生にのみ依るべからざる如く文学も亦実験にのみ依るべからず。写生にのみ依らんか絵画は終に微妙の趣味を現す能はざらん、実験にのみ依らんか尋常一様の経歴ある作者の文学は到底陳套を脱する能はざるべし。文学は伝記にあらず紀実にあらず。文学者の頭脳は四畳半の古机にもたれながら其理想は天地八荒の中に逍遙して無碍自在に美趣を求む」

この時期の子規は不折と同じく、実験（写生）と理想を同等に大切なものとして平等に考えていることが、この文章から明らかである。

#### 4. おわりに

「写生」論を子規が俳論に取り入れたことに関する今までの俳句辞典・事典の記述は、フォンタネージや浅井忠と不折の写生論を同じ内容のものとして捉えたものであった。しかし、『画道一斑』の「天然と人工」の節を通読して子規の俳論とを読み比べただけでも、フォンタネージから浅井忠に受け継がれた写生論と、不折から子規へと受け継がれた写生論には違いのあることが明らかである。

今後も不折の画論を丁寧に読み、子規の俳論との類似点

と相違点を明らかにしてゆきたい。

#### 注

- 1) 『俳文学大事典』角川書店 平成7年10月、『現代俳句大事典』三省堂 平成17年11月など。
- 2) 「岡山県立大学デザイン学部紀要」vol.14 No.1 平成20年3月13頁～18頁
- 3) 「正岡子規研究」平成20年6月 16頁～22頁
- 4) 博文館 明治39年10月 40頁～49頁

#### 引用文献

『子規全集』は講談社版（昭和50年4月～昭和53年2月）を用いた。ルビは省略し、原則として新字体を用いた。『画道一斑』（博文館 明治39年10月）。ルビは一部を残し省略し、原則として新字体を用いた。横書きのため、踊り字を用いることができなかつたところがある。

\*正岡子規と中村不折の写生論の研究（1） 柴田奈美